

エッセー

副学長のサブノート



金沢工業大学
副学長

佐藤 恵一



「夢考房キャンパス」の飛躍をめざして

ベトナムにまで広がる

PD 教育プログラム

6月初旬、金沢からベトナムへ。昼過ぎに小松空港発（成田経由）、当日の夜にはホーチミン着。時差が2時間あるものかなり近い。今、ベトナムの若者たちの目は日本に注がれている。向学心旺盛だ。今後、言葉の壁を越えて仲良くなっていきたいと心から思う。

今回の訪問は昨年から4回目である。その目的は、今秋開学する新大学（VJIT、越日工業大学）の教育プログラムの支援である。まずは教員の意識改革から始め、「学生中心の教育視点」の重要性を強調している。

カリキュラムの核になるのは、金沢工業大学（KIT）で実施・開発してきたプロジェクトデザイン（PD）教育である。日本とベトナム間でグローバルな交流が活発に行われること、そして優秀なベトナム人技術者が多数育っていくことなど、とても楽しみである。

PD教育では、実社会の問題を題材にしたチーム活動を通し、課題発見・解決・価値創造の力を身に付ける。大学で学んだ知識を実社会で活用、そしてさらに高度な専門知識を学ぶ動機付けのために重要な授業である。

KIT教育は、PD教育プログラムを主柱とする正課カリキュラムとそれを補

完する課外活動プログラムを並立して設定している。大学での学修は、授業時間以外も、いかに能動的に過ごすかが重要と考える。KITには学修の場としてのワークスペースが世界トップレベルの充実度で設けられている。

もちろん大事なはその活用である。「夢考房」は学生が自由にもつくり取り組める場所。現在、ABUアジア・太平洋ロボコン2013優勝のロボットプロジェクトなど14プロジェクトが活動中である。「自習室」は365日24時間オープンし、夜遅くまで盛況である。「アントレプレナーズラボ」では企業技術者、地域住民、教職員らと共に先端技術を学び学修活動をしている。学生は「場」を用意さえすれば、どんどんやるので驚かされる。

KIT 教育によって

新時代の人材を育成

思えば、多くの大学で、例題解答的な試験問題さえ解ければよい時代があった。現在、世の人材育成の要求は知識重点型から知識+創造+実践型へ大きくシフトしてきている。

ここで重ねて強調したいのは、KIT教育における課外活動と正課教育との連動の重要性である。その役割を果たしているのが、私がまとめ役を担っ

ている教育支援機構で、前述のPD教育や「夢考房」の活動などを支援する10の学修センターから成っている。これらの機能は、学生の「学修活動の支援」と「やる気の引き出し」である。

一般は、職員の意識向上をめざし、職場を徹底的に見つめた。実践目標「学生満足度の向上」に合致しているか、学生の成長に役立っているか、サポートは満足されているかなど、あらためて見直しをかけたのである。

一方、教員の活動には教育・研究・社会貢献の3分野がある。いかにこれらを融合し人材育成ができるか。この難題に全学を挙げて取り組んだのが、文部科学省に選定された「地（知）の拠点整備事業（COC事業）」である。2015年度は28プロジェクトが活動中で、さらに一層の全学的展開を指向している。

研究室での1コマ。「先生、ジェット流速を評価できた！高速度ビデオ映像から相関を使って」「A君やったね！」直接習わないことでも、自ら考え工夫し解決する能力は、新しくアイデアを創り出す能力と同様、非常に重要である。まだまだ受け身の学生も多いが、「夢考房」の理念が全学的に押し広げられたアクティブに行動する学生で溢れる「夢考房キャンパス」へ。さらなる飛躍をめざし、奮闘中である。